

「安全で温かい日常」を守り、繋ぐ

学校長 堂腰 康博

この夏も、日本各地で相次いだ自然災害のニュースに心を痛めております。被害に遭われた地域にご親族やゆかりのあるご家庭におかれましては、心配な日々をお過ごしだったことと思います。心よりお見舞い申し上げます。辛く厳しい環境のなかで、子どもたちの安全を守り、少しでも安心して過ごせるようにと、心を砕かれてきた被災地の方々のお気持ちに思いを馳せております。

あたり前の日常があたり前でなくなった状況の中、子どもたちはきっと、自分たちにできることを考えながら、楽しかったはずの夏休みを健気に過ごしたのではないかと推察しています。

約10年前の熊本地震の際、わたしは教育行政の場に身を置いていました。当時、緊急支援として現地の小学校へ派遣された同僚の話が、今も心に残っています。

「大人が明日の生活を取り戻そうと必死にがんばる陰で、子どもたちはみんな驚くほど『いい子』にしているんです。迷惑をかけてはいけないと弱音ひとつ吐かないんです。あの混乱の中で子どもたちは必死に「空気」を読んでいる。でも、自分の感情にふたをしているうちに、表情がすーっと消えていってしまうんですね…」

同僚は、声の上がらない子どもたちのSOSを見落とすことなく「大変だったね」「怖かったね」と寄り添い、感情を吐き出させてやり、彼らの心をほぐす支援を続けたといいます。わたしたちはどうしても「子どもを危険から遠ざけること」を優先に考えがちですが、さらに必要なのは、不安や恐れをそのまま言葉にできる居場所を用意することなのだと、その時、学ばせてもらいました。

40日間の夏休みが明け、校舎に子どもたちの弾けるような歓声が戻ってきました。

友だちとの再会を喜び合い、思い出を夢中で語る子どもたちの姿を目にするたび、胸が熱くなります。朝起きて学校へ向かい、友達と笑い、遊び、学び、無事に家へ帰る。わたしたちが普段、何気なく過ごしているこの「あたりまえの日常」が、何にも代えがたい営みなのだと痛感します。

被災地に思いを巡らせることは、翻って、今、目の前にいる子どもたちを、温かく包み込むようなまなざしをわたしたちに与えてくれます。子どもたちが安心してその子らしくいられる場所を、学校・家庭・地域が手を取り合って守り抜くこと。命を守る教育とは、そうした日々の確かな安心の積み重ねの上に成り立つものだと思っております。

いよいよ本校は、創立50周年という大きな節目を迎えます。この半世紀の間、地域のみなさまや先輩方が育み、守り抜いてくださった「安全で温かい日常」というバトンを、次の世代へと繋いでいきます。子どもたちの命と未来を守る決意を新たに実り多き日々をともに歩んでいきたいと思っております。

引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。



ヒガホンの校舎に、50周年記念事業の横断幕が掲げられています。